

---

# INABA 178

日野五十鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

INABA 178

### 【Nコード】

N0508K

### 【作者名】

日野五十鈴

### 【あらすじ】

彼女は、冷たい水の中にいた。冷たくなって帰ってきた…いや、もう帰ってこない彼女を見て。それを覚悟している自分に気付き、彼は泣いた。そして。彼女が再び目を開けたのは…水の中、だった。

彼女は、冷たい水の中にいた。

冷たくなって帰ってきた…いや、もう帰ってこない彼女を見て。

それを覚悟している自分に気づき、彼は泣いた。

そして。

彼女が再び目を開けたのは…水の中、だった。

死者の意識がどこに行くのか知る者はいないし、ましてやそれが“生き返り”ならなおさらだった。

命も意識も、彼女の中に唐突に再生した。

目覚めたとき、彼女は円形の台の上において、頭の中には何も浮かんでこなかった。

自分が何者であるのか、何のために存在するのか。それを知るすべを持っていなかったのだ。

力の人らない足を動かすと、足の先に湿った床とガラスの欠片が触れた。

ガラスはつい先程まで彼女を抱いていた殻だった。床にひろがる水は、つい先程まで殻の中に満たされていたものだった。

彼女はほんの少し前に殻の…装置の中から孵ったのだ。彼女を抱いたガラスは彼女に意識が宿ると同時に爆破し、割れた。

「INABA 178、目覚めました」

不意に声が聞こえて、彼女は視線を上げた。

室内には機械と、白衣を着た数人の人間たちが彼女を見ている。

手前にいた壮年の男が、満足げに何度も頷いていた。

「あらたに新谷先生、ついにやりましたね！」

若い研究員が、手前にいる壮年の男に言った。

「これでBHDの製造技術が確立しましたよ」

「…BHD…」

彼女は聞こえてきた言葉を拾い、…全てを理解した。

自分が何者であるのか、何のために存在するのか。

ふむ、と新谷がやっと呟いた。

「前の生の記憶があるか定かではないが、これからはイナバと呼ぶことにする」

「…イナバ…」

「そう、イナバだ。…名をたまわるのは、お前の使命が重いからだ。よく覚えておけ」

彼女は…イナバは頷いた。何が重いのか、言われなくても分かっていた。

新谷はふっと鬨りのある笑みを浮かべた。

「さあ。これからお前の力を存分に発揮するといい！」

新谷には、1人の娘がいた。

しかしその娘は16歳のとき水難事故で溺死し、遺体は妻を亡くしたばかりの新谷のもとへと運ばれた。

しかし新谷は娘の遺体を荼毘にすることを拒み、研究所：BHDの開発施設へと運んだ。

娘を生き返らせるために。

20世紀末に自立二足歩行ロボットが開発されてから数十年。テクノロジーの飛躍的進歩は、アンドロイドの量産化を成功させていた。災害救助などの危険な作業や、掃除洗濯をはじめとする面倒な作業は、すでに彼等の仕事となっている。

そんな科学技術をもってしても、彼等に“感情”をインストールする方法の確立だけは未だに成功していなかった。それが実現すればアンドロイドの多方面での活躍が期待されるため、学者たちはそのボトルネックをどうにかしようとかやっきになっていた。

だが、その逆をいこうと研究する人たちも少数だがいる。

つまり、感情を持つ生物を機械化させようというのだ。

新谷の研究もそれにあたるのだが、方法が他とは少し違う。身体に機械を取り付けるのではなく、脳などの臓器にメスを入れてヒトには不可能な動きを可能にしようというもの。

彼らはそれを『Biomimetics Humanization  
n Doi』略して『BHD』と名付け、呼んでいた。

そして、それは完成した。

それが彼の娘：INABA 178だ。

BHDの確立により、新谷は巨万の富を得ることになる。

INABA 178をもとにBHDは多方面で活躍し、それに並行してBHD自体も次々と進化を遂げていった。

当初の目的どおり、確かに新型人造人間は“多方面での活躍”という問題をクリアしたのだ。

…しかし、人間の欲はキリを知らない。

BHDは災害救助や家事手伝いといった使い道だけでなく、兵器としてもまた開発されていったのだ。

各国はこぞつてBHDの身体強化、能力開発に精を出し、今や戦場に1体はBHDが駆り出されることになった。

そして、この時代の暗黒がある…。

「…先生…」

イナバは新谷の背中に声を投げた。

「なんだい？ イナバ」

「…私は、生まれてきて良かったのでしょうか…」

自分をもとに様々なBHDが生まれ、兵器として使われ、そして第三次世界大戦はとどまることを知らない。

「…私のせいで、今日もたくさんの方が死んでいます…私は、生まれてこない方が良かったのではないのでしょうか…」

「なにを言うかと思えば」

新谷はイナバに近づいた。

「それは神のみぞ知るところだろう。…もつとも“こうなることを分かって”お前を造り上げ、そして成功したのだから、神もそれを許したことになるんだろうがね」

イナバの頬がカアツと紅潮した。恥じらいではなく、怒りだ。

「…先生は、私たちBHDが兵器として使われることを予想していたのですか…」

「いずれそうなるだろう、と思っていたに過ぎないがね」

「…先生は、悪魔です…死神です…」

「大袈裟な…おい！ なんのマネだ！！」

イナバの両手が高々と挙げられたかと思うと、その手の中央には電気の走る光球がパチパチと音をたてていた。



「…先生は、悪い人です…」

そして光球が研究所内を満たし…。

…研究所は、爆音と共に無と化した。

そのときの爆風に飛ばされたかのように、イナバは空を駆けていた。

どこへ向かうのかも決めずに。

どこへ向かうのかも分からず。

…目を開けると、一切の記憶が消えていた。

ここがどこなのか、自分は誰なのか、まるで思い出せない。

「…おはよ」

声のした方に視線を向けると、なぜかすごく懐かしさを感じさせる男性が立っていた。まだ若い。30歳くらいだろうか。

彼は彼女の頬に触れ、逃げられる前に手を離した。

「…うん。熱もだいぶ下がったな。何か欲しいものあれば遠慮なく  
言えよ。小さいけどここは診療所だから、それなりの処置はできる  
し。そっだ、キミ名前は？」

少女はしばらく宙を眺めて、掠れた声でこれだけ言った。

…これだけは憶えていた。

「……………。…イナバ」

言うと、彼は嬉しそうに微笑んだ。

「稲葉さん、ね。俺は新谷零時<sup>れいじ</sup>」

辿り着いたのは、自分が彼の娘として生まれる前の“過去”の世界。

父と娘。開発者と造られた者。

両者の新たな関係が始まる。

f  
i  
n  
.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0508k/>

---

I N A B A 1 7 8

2010年10月28日03時15分発行